

第七六三空殘整第一〇六號

昭和二十一年九月十五日

第七六三空殘整業務整理員 出田宗孝

各地方復員局人事部長殿

比島「クラーク」地帯即戦斗状況（遺族宛）

通知資料（送附）ニ關スル件

小生歸還後本年二月第一回ノ調査結果提出以來各道縣ノ方々ヨリ手紙ニ  
 アル照會又ハ直接御來訪被下方多感アリ、例レ千御自身家族ノ身上ノコ  
 トトテ生存中ノ状況戦死時ノ状況等向合極メテ細密ニ且リ一片ノ書狀ニ  
 テハ在回答不可能、且又詳細ニ御返事ヲ希上ゲルコト又時間的ニ余  
 顧ナキ爲困難ナル状況ニ有之候  
 依テ別紙ノ熊斗狀況詳細小生ノ調査シ得タル範圍ニテ御通知申シ候間各  
 道縣ノ御満足ヲ得ル迄御説明被下度此段屬上候

(終)

1658

下比島「クラーク」地區戦斗状況（隨處者ヨリノ遺族通知資料）

復員後多移の方ニヨリ比島「クラーク」地區ノ戦斗状況ニツキテ照會アリ、隨處者來訪下サル方ニ多クアリマシタカ何レモ各個人ノ生前ヨリ戦死迄ノコト詳細ニ通知セヨトノコトデアリマスシ、且照會ノ數種メテ多ク、部隊ニ共通ノ戦況等一々繰り返シ手續ヒテ御通知致スコトハ時間的ニ不可能トナツテ参リマシタノデ、乍失禮ニ思ヒテ、コトニ御知ラヒスル次第デアリマス

何分當部隊ハ玉碎一步前迄ノ状況ニアリ生存者僅少（終戦時迄ノ戦死者約九七%）ノタメ調査極メテ困難デアリ、特ニ將校以下一ケ中隊全滅等ノ場ニ合ニハ各個人ノ最後ノ状況ハ知リヤウガアリマセンノデ、其ノ旨御了承ヲ御座ビ致シマス

懇へハ慘タル戦ヒデシタ

昭和十九年十月米軍「フレイト」上陸ヲ期トシテコノ大戦争ノ最後ノ決

賊ト信セラレテキタ捷脚作戦カ比高ニ展開セラレマシタ、南方ヨリ逐次  
前進シテ、キタ第一航空艦隊ヲ、内地ニテ訓練存機シテキタ第二航空艦  
隊ヲ日本ノ持つツテキタ陸海軍航空部隊ノ最精銳ガ比高ニ進出シ、ソノ主  
力カ「クラーク」地區へ「ルソン」局中央平原ニアル飛行場地區ニ集  
中「タクロバン」其他ノ米軍基地及母艦兵力トノ間ニ劇烈ナ航空戦ガ展  
開サレマシタガ悲シイ哉飛行機ノ補給減カズ十一月十二月ト経過スルニ  
ツレテ飛行場ニアル飛行機ノ數ハ急遽ニ減少シ、十二月頃ニ至ツテ自分  
ノキタ「クラーク」中飛行場ニテ飛テ飛行機ハ必死ノ努力ニテ拘ラズ陸  
上攻撃機一機陸上爆撃機二―三機程度ヲ百數十隻ノ船艦ヲ相ツイテ輸  
送來ル敵ノ上陸ヲ阻止スルコトハ出来ズ、飛行機ヲ殆クナク我ガ  
輸送能力テハ基地機動部隊ト稱シタ一、二航空艦隊ニ遂ニ大部分ハ臺灣ヘキ  
内地ヘ毛鷲道スルコトハ出来ズ、D24、B25等ノ連日ノ爆撃ニ因テ陸上  
シテバ、ツツ陥私二十年一月六日陸軍部署ニ就キマシタ、キトキト大部分ハ  
ヘ十日間ノ戦斗準備ヲ以テ空軍ニテ進出シタ我々航空部隊デハ陸軍機備

トシテハ何チナク、<sup>機</sup>飛行機ノ機銃ヲハズ、<sup>機</sup>機ツタ爆弾カラ黄色火柴  
チ私キ出シテ自ラ手榴彈ヲ造リ起戦卒ヲ殺害シテ十斤包(爆薬)ヲ造  
リ武装編制ヲ行フト。ニ初級士官ト初級兵等ニ至ル迄理成教育ヲ行ヒツ  
ツ陣地構築ニ努メマシタ

1940

「カ」ツテ見ナレタ陸軍ノ裝備トハ異リ、飛行機カラ下リテキタマフモノヤウ  
ノ服裝デ、防着服ニ飛行帽飛行靴。肩ニ航空機用旋回取<sup>機銃</sup>ヒツ固定機銃ヲ  
攜ツテ五、六〇〇發ノ彈藥ヲ首ニ冠キツケテ西方ノ高脚ニ登ツテ行ク姿  
ハ外國映畫デキ出テ來サウナ感ジデシタガ、ドウ見テキ正統裝備ノ兵ニ  
ハ見エマセン一例チアゲルト五〇〇人ノ部隊ニ小銃七七挺各自彈藥九〇發  
發乃至一〇〇發トイフ負傷ト裝備ト當時ハ頭帽ノ帽子テシタガ縮履イキ  
キノハ無イノデ仕方アリマシテシカシ實際戦ツタ經驗デハ問題  
ニナリマシンドシマ飛行機、我軍 重視、<sup>機</sup>機ノ前ニハ、人員ヤ  
小銃ノ數ハ何ノ役ニキタナイチテアツタノデス。シカシ當時ノ我々  
ニハ機銃ト<sup>機</sup>機<sup>機</sup>機ト手榴彈ノヒガ火砲ナキコエチオビアル部隊トシテ與

へテレタ兵器デシタ。飛行機迎撃ノ高角砲ハ二五口径機銃ハ戦闘ノ初期  
 ニ於テ非常ニ奮戦シ最後ノ一門迄射撃戦ヒマシタガ二月ニハ砲ハ全戦  
 線殆ド皆無ニナツテキタヤウデアリマス  
 爆弾ヲ抱イテ戦車ト心中スル特以兵器ヲ自動車ノ發條デ製作シタ斬込  
 兵軍力ヲ小銃隊ノ局面デ目ヲ生カテ扱ケ捨テテ戦場ニ於テ鹿角一〇  
 〇ヲ期待シタ怒壯ヲ特攻隊ノ氣氣込テ奮氣込ダケテハ戦車ニナラズ、  
 士氣旺盛ナ我第一陣地（トイツテキ彼方ニ橋給除ノナイ孤立シタ部隊  
 ニトツテハ之カ即チ全陣地デシタガ）ニハ敵ノ歩兵千戦車千迫付カズ  
 數千米離レタ所カラ猛烈ニ砲撃ト炸撃テ車ヲ木ヲ一切ノ障礙物ヲ燒キ  
 抑ヒ塚ノ入口ガ暴露スルトソコヘ必日十夜間隔位デ砲撃カ集中サレ友  
 軍ノ行動不能トナツタ所テ不發彈ヲ打ち込マレ、ソノ猛砲撃ノタメ、  
 ソノ陣地ガ總ンデ陣地ハ塚全隊カ逐次崩壊埋没シテ行ク狀況デシタ  
 埋没シタ陣地ノ砲撃ヲ之マター一日ヒツキリナシニ連射打込ム白煙彈デ  
 煙幕ヲ作り我側防線ヲ猛射撃ニヨリ制壓シツツ戦車歩兵ガ隊々ニ歩

イテ來マス、燃幕ガ消エテ、連絡ノ由來ル様ニ付ツタ時ハ陣ノ陣地ハ突  
 破サレテキルトイフ状況デシタ、ソレテ千勇取テ我將兵ハ谷間ニ隠レ  
 テハ突然機銃ノ猛射ヲ敵ノ首級カラ浴ヒタリ後方ノ宿營地ハ飛行場ニ  
 斬込ヲ決行シテキマシタ、小銃ノ打チ方ヲ知ラナイ補充兵ハ上等兵ガ  
 二人デ「ドウ」驛附近デ行動中ノ戦車ヲ燦破シテ無傷デ歸ツテ來タリ  
 シテ士氣ヲアゲテキマシタ、キシ自分達ガ普通ノ裝備ヲ持ツテ假ニコ  
 ノ陣地ヲ攻撃シタラ一週間カ十日デ蹂躪シ去ル程度ノ貧弱ナ陣地デシ  
 タカ唯壕ノ中ニ生キタ人間ガ頑強ルトイフ丈ノ方法テ敵ノ侵攻ヲ阻止  
 擊殺シ主陣地ノ抵抗ガ續ケラレマシタカ左翼中部ヲ突破サレ後方ノ司  
 令部ハ野戰病院ノ位置迄突破サレルニ至ツテ三月二十一日自分達ヲ最  
 右翼部隊ヲ逐ニ殘サレタ唯一ノ通線タル「ジャンダル」内ノ小路ニヨ  
 ツテ西方へ情進カ合ヒラレマシタ

この時突撃された左翼及中央にわたる部隊は大部分が玉碎し左翼より中央迄の第十三、第十四、第十五各隊は激戦ありし第十七隊は戦時の中絶時の生存者は合計約百名、最右端第一線にゐた第十六隊は生存者約三百五十名であります、従つて戦後者の大部分はこの戦場で消息不明となつて居ります自分たちは後方より敵の追撃を受けつつ右前方、右側方に敵主力を受け更に一歩は左に宇廻しつつある情勢を受け乍ら後衛部隊として行進し標高一七八〇米のピナツホ山中の機動隊となり翌月下旬にはスピック西方より山砲、追撃砲を有する部隊來攻し更に西海岸イバ方面より敵の進攻あり東西より包圍攻撃し來れる敵軍は友軍主力の位置を求めつつ兩軍に合して北方へ推討して行きました、自分達の部隊は包圍攻撃を受けつつ身西に交戦したる後隊どもジャングルの中に伏せたまま銃口を送り敵の北方へ推討移動して行くのを見送り再び脱出に成功し得ました、此等のジャングルはそれ程澁密なものではなく一寸身体を動かしても樹

が動いて所在を暴露します。●すぐ眼の前の線路地帯で敵が迫撃射をついてワンスモークとか何とか言ひ乍ら射つてゐる様子が見える距離なので自分達も完全に無言で首撃管制を行ひつつ地に伏してこの境地を脱しました。三月に生き残つた少尉の隊員(古傷病兵)中の大部分が更にこの線路で陣死した。この時以後直接連絡のとれる友軍部隊は数百名でありました。この最後の包圍戦的攻撃を受けりからは大規模な暴動にもならず強迫きに包圍せられたまま暗戦となりましたがこの頃から確信よりも恐しい餓饉の生活に落ちざるを得ませんでした。内地との通信も若干の手信以外には途絶え、この山中の密林では進行機によつても潜水機によつてもすでに友軍の連絡網は絶望でした。もともと此處で九年の十二月に進行地にかたから一人一日三回に亘る米麥に芽を混食してゐたやうな給養の不十分な比島クラーク地帯で食糧不足も絶望は當然悪化する。一方で四月には大低の山腹では米麥皆無になつてゐました。自分達の行隊も五月から完全に米なし生活に入り、山中で詳細を立めて待望しました。



た、住民は非常に意欲強く敵の上陸に先立ち落下傘にて兵器を空中投下さ  
れ武装しあり部落には近付き得ず山中の茅畑に各部隊の多数の人員が侵入  
するので到底足りる筈はなからずの葉が主で茅が香といふ異音その茅ですら  
八月末にはなくなつて了ひました其他「比島春菊」だとか「とろろ」の木  
だとか勝手に命名した藪草材木（？）を主としあとは手あたり次第に竹の  
やうな「たけのこ」でも「むらび」でも「かたつむり」「とらげ」「ばつ  
た」「いなこ」「なめくじ」「みみず」に至るまで一切を喰ひ盡しました  
「鱒魚」や「鮫」「鼠」を捕へた時などは隣の家際に送宣傳する程の喜び  
でした。今の内地で栄養失調などといつてゐる状態は未だ未だ問題になり  
ません本當に栄養失調となり餓死して行くものを自分の眼で見且自分が除  
どい所まで衰弱した経験から見るとそこらで経験のない栄養失調や代用食  
を喰はしてゐる人間達が馬鹿馬鹿しくて仕方がありません。「喰ひづら」  
では餓死といふものはないけれども栄養不足のため体力抵抗力がなく脚傷  
も治らずマラリヤ、赤痢等の脚病も先づ先づ回復することなく倒れて行き

1666

ます。完全に腹の無い腹が、世から援助を受ける約一ヶ月半辛子で味をつ  
りて生きつづけた例もあります。腹の不足は腹不足で身体の状態が破綻す  
るよりも前に腹がないと山中の野草等は味も何もなく腹が痛くもつけない味  
を認らないので身体の状態を云々する辛子の説とは別な意味で苦しみがあ  
ります。内地へ歸つて人間の栽培する野菜は眞實に美味だと思ひました。  
野山の草木とは雲泥の差です。しかし内地になると西だかんだと言ふやう  
になつて來るので人間の營養にはきりが無いと思ひます。内地へ歸つてか  
ら芋の葉などを思出してみればよくあのやうに困苦缺乏に耐えることが正  
常だかと思ふばかり不怠な位です

五月、以前の野山では弾丸による消耗も若干はありましたが重の原因（傷  
病の悪化）で次々に倒れるものも出てし慮すべき状態でした。四月から八  
月迄の雨季は内地の梅雨と較べものにならないドシヤ降りやの連続でジヤン  
グルの中で過す我々には弾丸よりも恐しい雨のため一切が滞りにやられ  
て軍病患者は一雨毎に拍車をかけられるやうに増がして行きまし

た米が全無となりてから殆ど一ヶ月の者は全失調症（當時はそんな言葉が）  
は知らず脚が腎臓病のやうなものと誤つておりましたが）で顔も腫れもむく  
んで皆人相が衰つて居ました。下痢は止らず夜は勿論見えず歩行にも安定  
がとれず可笑しい位麻痺をまひました。こんなに苦しむよりはむしろ丸に  
當つて死んだ方が楽だと言ふので敵を知るものはなくなつて了ひました  
この頃には噂ふ方の伝説が深刻で敵の動きや陣地の位置は大分の兵によつ  
ては隠蔽になりませんでした  
八月。思ひかひなくも國史始つて以來の（通信連絡殆ど途絶して  
ゐた我々には詳細なる経過はわからずそのやうな惨めな無事件地であつ  
たことは武装解除をうけてからずっと後で知つたことでした）西軍方面盛  
原司令官より正式命令を受け、降参を確約し、降参した時一月頃約二万  
近かつたクラーク地帯に降参し、降参生存者傷病兵台セテ此の五名。もし降参が  
更に一ヶ月続いたら生き残るものはもう百名も期待出来なかつたでせう  
正に玉碎五分前といふ所でした

三月十二日一晩〇〇時前後停止、武装解除（かゝつたことを知らずに死んで行つた人々のことを想ふとたまらぬ氣來てした）以後マニラ南方カユルパン收容所に收容されましたがここでうつかり襦袢にさして書翰は勿論、  
に至る迄取上られ人車書類なども没収されました

しかも各官の編成が解かれ將校と下士官長とバラバラに置かれたため連絡とれず何とか苦勞して手に入れた郵便や紙片を以て氣儘をたどりつつ筆を始めた次第です

しかし三月四月頃大部分の官隊は將校以下全滅してゐる筈なのに消息すらつかぬものがありまして個人の状況については完全な情報記録を得ることが不可能のものが非常に多くあります、しかし同じ陣中で居た者の一員としてたとへ一人でも消息不明のまままで残して居たかありませぬ、  
の新聞が無く全書類編して了つて居るので連絡は困難ですが、  
に於ては歸還者一同協力して大いに熱力したいと感ひます

(終)

養じて居る状態で多勢のしるがも他部隊の人々については記憶のないのか普通で

戦中であらう今日は何月何日か知らないことも厭々ありました

終戦後連絡のとれないこと  
終戦後收容所に入つてから部隊の編制を解かれハラハラに收容されて居たので連絡とれず

そのとき各個人としてハラハラに送還されて居る爲調査極めて困難であります

○英皇供養の件

終戦を確認したく、米軍に收容されてからは何も出来なかつたので、昭和二十九年九月四日、「ルソン」島ヒエツホ山奥方約七Kの標高一〇〇〇米の地窟（通称深山）に木造の慰魂碑を建立、最高指揮官陸軍中將塚田喜智、海軍部隊指揮官海軍大佐佐多直大以下多数参列し慰霊祭を行いました。實物の寫眞はフィルムを没収されたので御目にかけられません

○遺骨の件

遺骨の調査が、いまでも死んだ様な気がしないから死んだといふ證據がよくありません。一方、當地に散らばる例外的地は何もありません

遺骸の處置について自分の知つて居る範圍の所ては大の通りです

昭和十九年度内戦没者は火葬にして遺骨を其の後陣地内に安置しましたか多くは陣地將兵と共に埋没、昭和二十年一二三月頃迄は陣地近くに土葬遺品を戦友が携行しました。三四月の包圍戰の攻撃を受けた時は部隊全滅の所は部隊全員行方不明、生存者の居る所ては其の場にて土をかり木碑を建てた程度のもあります

包圍攻撃されて居る中て僅少の生存者ては生存者の何倍といふ多數の死体に對し手厚い處置は事實上不可能でした

五月以降は戦没者は割合少かつたので土葬にして木碑を建ててあります

遺品を戦友が持つて來たものも終戦時一切を米軍に没収された、時に大部分は身ぐるみ抜いて土葬になつて了つたりてこの時遺品も没収品と共に焼却されてしまひました

従つて甚だ申し譯ない次第でも遺骨も遺品も現地から携行し得ないことになりました

○戦死者公報が來てゐて生きて歸つた人があるかといふわけか、との照會に對して戦

陣中多數の死傷者が出た時陣地内に埋没したり或は砲弾で全身初碎されたりして死体も確認してゐないものもありますか、普通生き残つて部隊と共に所任の陣つて居るもの以外は戦死者と考

1671

9

へ戦死認定をしたものですか、これ以外に俘虜になつて居るものかあつたわけでも。とてつか戦  
闘中に俘虜になつた者は名前を内地に知られるのを恥しかつて、階級氏名を偽る者が非常に多か  
つたらしいのです

自分達の餘でも菊地といふ男がは候に出たまま戦友全部戦死して一人だけ俘虜となり、中村某と  
名乗つて居りました。終戦になつて歸還出来さうな事が解つてから其の男は改名唐を米車に出し  
たさうです。これに類する偽名の多いこと、俘虜名簿はローマ字で何度も再記され居るので  
誤字が多く名簿と對照しても併らぬものかあることを判了下さい

#### ○野戦病院の状況

戦病死するまで如何なる手當を受けたかとか、付添兵を知らせてくれとかいふ照會もありますか  
傷病者搬出し或る時期には三〇〇名の中隊員中健康なもの約三〇名しか無いといふ様なこともあ  
り、健康者が付添をするこはとでも出来ないので輕患者が重症患者の面倒を見て居り、清潔品  
は陸軍部隊より貰つて貰つて居りました

負傷者は個體によるものも多く、病氣は「マラリヤ」と赤痢が多い様でした

クラーク防衛海軍部隊兵士病院は三月中旬敵の急襲を受けて全滅し、第十六戦區部隊野戦病院は

戦況により維持不可能となり、山の上流にて解散患者は全部原部隊に復帰しました。生命保険の記録で病名、病年月日と適合される方がおりますか。當方にて照會した所では戦死公報か、これは保険金は支拂はれます。病名、病年月日等は記録の古いものが大部分です。

### 野隊の形式

野隊の形式は、戦死した時に所在した野隊の地形を照會せられた方もありますか。あつて誰かとならに居たかは寸解り兼ねます。

野隊の形式は「型」、「長靴型」は一人宛、「の字」型は部隊二十名位使用して居住し、戦死地等に必要に應じて進出します。

何れも素堀り一部に板を使つた所もありませんか。「コンクリート」は資材もなし、工事期間もないので使つてありません。壕は草塚又は密林のりです。

それ等の 天蓋は六―一〇米、又は五〇―乃至一庭の深さに耐えるものと言はれて居ました。長時間連続の猛砲撃、戦車砲の直撃により入口附近から破壊して埋没したものであります。



○兵詰等の被我の差異等戦況についての照會

あまり詳しくお返事する必要もないと思ひます。米軍も優秀な装備を持つ師団に飛行機、戦車火砲を終始協力して進軍して來たので我々は殆ど前空部隊ばかりで何の陸戦装備もなく昭和十九年十二月から昭和二十年一月にかけて飛行機が無くなつて了つた爲に苦慮なしに陸戦部隊についたので、装備の差は歴代的でした。昭和二十二年一月以降内地よりの補給連絡も絶つて了つたので如何とも爲し得なかりました

いまして居るのに戦狼關係で歸つて來ないので居ないかとの照會に對して

クラーク地原部には航空關係が大分なものと、その大部分が昭和十九年十月以降は作戦の爲南方より運送又は内地より進出したものにて住民との交際は殆どなく戦況は先づ無いと思つて居ます

しかし詳細については承知して居りません

○部隊名の調査について

小生宛直接御照會又は御來訪された方の中、部隊名を記入される方に問合せられる方が屢々あり二頁に御面倒をおかけすることになり御氣の毒です

小生は個人として自分の所屬して居た第七六三海軍航空隊の名簿は持つて居りますがそれ以外の方の名簿は所持しませんから先づ各人事部へ御照會の上部隊名判明した上で小生に解ることとし、たら人事部より送、又は直接御照會下さる様に御願ひ致します

自分の所屬してゐた部隊關係のものでは各生存者に照會し個人消息に至る迄極力調査致します。又クレーク地區部隊に所屬して居たことか明らかば方に對しては個人状況は不明でも所屬部隊の行動戦況等出来る限りのことを御説明致します

マニラ、北部ルソン、南<sup>北</sup>、中<sup>北</sup>等の方にて直接御照會された方もありますか、之等は全然小生にては調査出来やせんから人事部にて調査に御趣置を御願ひ致します

○地圖

「クラミケとは何れの地なりや」「ルソン島とは何處の島なりや」「汝等は比島に居ると言ふ人もあり「ルソン」島に居るといふ人もあり何れか本當か知らされたい」等との御照會された方かあ

りますか各人事郎にて地圖を提示される様御組びします  
所要の地名地記入地圖一葉添付して置きます

20 11

1676